

**THE CALL OF WHISKEY
GEORGE COCKLE**



ザ カル オブ ウイスキー
ジョージ カックル

ウイスキーは旅と同じで、呼ばれるものだと思う。自然に呼ばれるからこそ、付き合えるのかもしれない。

僕は二十歳を過ぎて酒を飲めるようになつても、大抵の人と同じように、バーでウイスキーを頼むのはハードルが高かつた。最初はビール以外、何を頼めばいいかわからずに入った。ある日、隣に座っている人が頼んだジンライムを真似して飲んでみると、小学生の頃につけていたバイタリスというヘアトニックを思い出した。海に入つても形が崩れないという理由から、子供なのにバイタリスを愛用し、シャワーを浴びるとそれが顔を伝つて口の中に入つていた思い出がある。そんな記憶をジンライムが蘇らてくれた。

やがて時が経ち、僕はウイスキーに感謝するいくつかのキーポイントに巡り合つた。

最初の記憶はシンガーの浅川マキのライブによく行つていた時代だ。中央線沿いの店で開催されたライブを観に行つた時のこと。そこは怪しい雰囲気の一軒家だった。店の中は暗く、客のほとんどは男性。もう何十年前のことだから、きつ

と思い出が勝手な道を走つていると思うが、記憶の中では皆んな黒いサングラスをかけ、ベレー帽をかぶついていた。そして彼らの小さなテーブルには氷の入つたウイスキーのグラス。僕は見とれていた。まるで五〇年代のビートニックの世界に迷い込んだ感じだつた。浅川マキがステージに立つと、瞬間的にスポットライトが当たつたが、彼女は自分からライトを外してくれと言つていた。不思議な世界だつた。暗闇で飲むウイスキー、暗闇で歌う浅川マキ。実はまだこの時も、僕にはウイスキーはハードルが高くて飲めず、以降、何年もの間、羨ましい気持ちが心に残つっていた。

ウイスキーにまつわる話は、ロンドンにもある。ジャズシンガー阿川泰子さんの一九九六年のアルバム「Echoes」のレコードイングでロンドンを訪れた時のことだ。彼女はシェラトンに泊まつていた。仕事が終わり、二人でロビーの横にあつたバーに足を運ぶと、カウンターの向こうには様々なウイスキーが並んでいた。バーテンダーはもちろん蝶ネクタイ姿。その上品な雰囲気に圧倒されながらも、まずはリコменドを聞いてみた。この時初めて僕は、何年も寝かせたウイスキーをロックで飲んだ。驚くほどまろやかで、喉をスルスルと通り抜けていく。品があり、これこそ僕が求めていたウイスキーだと感じたほどだ。そして店でウイスキーを飲むときは、バーテンダーの質が飲み手の想いを左右するのだと思つ

た。このとき、僕はやつとウイスキーに呼ばれたのだ。

その後、カリフォルニアへ渡った僕は、サンフランシスコで築百年の家を購入した。アメリカ人がよくやるよう、その家を友達と一緒にリフォームしていく。中でも一階のキッチンのカウンター作りは力が入った。夜ひとりでカウンターに座り、浅川マキを聞きたかったのだ。以前、日本で見たライブのように、ウイスキーをかっこよく飲むのが理想だ。そのため特別な黒い石を貼ったカウンターを作り、天井には十二ボルトのケーブルライトを設置した。上から二本の細いワイヤーを下げ、そこに小さいスポットライトをかけて、光がカウンターの真ん中にあたるように取り付けた。椅子はちょっと高さのあるバー・スツール。そこに座つてロックグラスにウイスキーを注ぎ、一九七〇年に発売された浅川マキのデビューアルバム「浅川マキの世界」をかける。一曲目の「夜が明けたら」から、最後までじっくり聞く。CDではなく、レコードでね。アナログの音はまろやかで、ウイスキーにしつくりくる。暗闇の中、スポットの光でレコードを聴くのは特別な時間だ。ちょうど一杯飲むぐらいのタイミングで、レコードを裏返す時間になる。これはアナログのいいところだ。わざわざ立つてプレイヤーのところへ行き、ゆっくりレコードを返し、針を乗せる。最初のバチバチした音を聞くのもロマンチックで、そんな雰囲気もまたウイスキーによく似合う。特別な時

間となるのだ。

僕は今、家族とともに、鎌倉に暮らしている。家のすぐ横には江ノ電が走る。僕はまたそんな家の一角に、江ノ電を見下ろすようなカウンターを作った。上からいくつかのプランターを吊るし、昼間はその成長を眺め、夜になると、そこに座つて電車を眺めながら一杯飲む。江ノ電は二両か四両ということもあり、ゴトンゴトンという音をさせながら、あつという間に目の前を過ぎていく。片手にウイスキーのグラスを持ちながら、家族が寝静まった夜にひと息つくのが僕の楽しみだ。実は先月、ただのサボテンだと思っていたひとつ鉢に、大輪の白い花が咲いた。調べてみると、ほんのひと晩だけ姿を見せるという月下美人という花だった。宵闇に堂々と咲く、透き通るような白い花。僕は夢に、釘付けになつた。その夜のウイスキーはいつにも増して美味しかつたのは、言うまでもない。

ジョージ・カックル ラジオ・パーソナリティ。一九五六年鎌倉生まれ。幼少時代を日本、テキサス、韓国で過ごす。インドをはじめ世界各国を放浪し、十八年に及ぶサンフランシスコ生活を経て拠点を日本に移す。アメリカ、日本で多種多様な職業を経験したのち、音楽プロデューサー、コラムニスト、作詞家、サークルとして多忙な日々を送る。現在はインターネットFMや湘南ピーチFMで自身の音楽番組を持つ。著書に『ジョージ・カックルのWELL WELL WELL』、『クロウ人生論』『ジョージ・カックルの鎌倉ガイド』など多数、雑誌『ザ・サーファーズ・ジャーナル日本版』のマネージング・ディレクターを務める。